NCCLA 孤児院について



NCCLA(The New Cambodian Children's Life Association)孤児院は、プノンペン市内にあり、2004 年にネスとタヴィーによってスタートしました。

親がエイズでなくなったり、親戚に売り飛ばされたり、子どもたちがここに来ることになった経緯は、私たちが出会った、今の子どもたちの笑顔からは想像できません。

子どもが出来ないこの夫婦が孤児院を始めたおかげで、この孤児院に引き取られた子どもたちはたくさんの人に愛され、今、輝いて生きています。

孤児院近くのレストラン(ヴェイヨ・トンレ)にて、週 2 回子ども達が踊り、飲食代や寄付金によって、2005 年 10 月より 25 人全員の子ども達が、公立の小学校に通い始めることが出来ました。学校に通いながら、踊りの練習を一日 2 時間(週 5 回)、頑張ってしています。

LAY NETH 物語

1970 年プノンペン市に生まれる。

父親は医者で、祖父母、両親、弟・妹が 4 人の計 9 人で暮らしていたが、平和で豊かな生活も 1975 年のポルポト政権の始まりとともに終わりを告げる。ポルポト政権は知識人を抵抗勢力になる恐れがあるからと捕まえ処刑しており、医者だったネスさんの父親も例外ではなかった。

ポルポト政権は知識人の家族も捕まえ処刑していたので、ネスさん一家はプノンペンの南西にあるタケオ州に逃げるように移り住んだが、祖父もポルポト政権に捕まり殺され、まだ幼かった弟や妹たちは次々と栄養失調などで死んでしまった。

1979 年になるとベトナム軍が侵攻してきて、ポルポト政権による支配が終わり、ネスさん一家はプノンペン郊外に移り住む。

このときまで学校に行ったことのなかったネスさんは、初めて小学校に通い始める。9 歳になっていたが、1 年生だった。片道 10kmの道のりを毎日歩いて通い続けた。

わずかではあったが、祖父の残してくれた金の薄い板があり、それを少しずつ切って換金し、生活費や学費に充てていた。その金の板もやがて少なくなり祖母とネスさんとで農産物を農家から仕入れ、売り歩くことになる。

それでも生活は苦しく、ネスさんは家から 5km のところにあったガラス工場のゴミ捨て場に行き、ガラスの破片を拾ってリサイクル業者に売ってお金を稼いでいた。学校が終わってから拾いに行くので時間はあまりなく、1 日 2～3 時間拾って 400 リエル(20 円)程度だった。勉強は一生懸命取り組んでいたので、無事に小学校を卒業することができた。

小学校の卒業を機に、中学校や市場が近くにあることから、プノンペン市内の中心部に移り住むことにした。このころ、祖母とネスさんはお菓子や仏像、パンなどを仕入れて売りに行っていた。相変わらず生活は苦しかったため、空いた時間に近くのゴミ捨て場でごみ拾いをしてお金を稼いでいた。

高校への入学も決まり、入学前の長い休みの期間を利用して、自転車タクシーをしてお金を稼いでいた。そんなある日、突然軍隊の人に捕まり、そのまま軍の施設へと連れていかれてしまう。当時はまだポルポト政権の残党と新しい政府との間で戦闘が行われており、高校へ入学できない青年は軍隊に入らなければならず、ネスさんは軍隊の人の勘違いで軍隊に入れられてしまった。

まだ若かったネスさんの言い分は軍隊の人に聞き入れてもらえず、戦地であるバッタンバン州へと配置され、戦闘に加わることになる。そのころ祖母は突然いなくなったネスさんの行方を捜し、軍隊に入っていることを知り、それからは高校への入学が許可されていることの証明書類を作るために奔走することになる。